

---

# **機動戦士ガンダム S E E D 介入された物語**

ヴァン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED 介入された物語

### 【NNコード】

N9108N

### 【作者名】 ヴァン

### 【あらすじ】

ガンダムSEEDの世界に行きたいと願っていたある高校生、そんな願いを叶えてくれた神様を名乗る女性が彼に機体と能力を与えたSEEDの世界へ連れて行つた。

なんか、他のアニメの武器やキャラが出たりしますが、基本的にSEEDです。

## プロローグ

俺は・・・・・思つた。

機動戦士ガンダムSEEDへ・・・行きたいと！

「そんな純粋な願いを叶えてくれー！」

そつ思つたら俺の目の前は・・・真つ白になつた。

「君の願いを叶えてあげる」

目をあけたらそこに現れた一人の女性がいた・・・俺の願いを叶えてくれるだと・・・マジか!

「ホントに叶えてくれるのか?」

「うん・・・私は神様だよ叶えてあげられるよー。」

マジで・・・こんな小説見たいな・・・展開があるとは・・・ホントにあるとは思わなかつたぜ。

「じゃあ俺をSEEDの世界に早く連れてつてくれー。」

「うん、じゃあ行く前に貴方の好きな機体と能力を二つ叶えてあげるよ」

好きな機体と・・・能力か・・・SEEDの機体で行くと面倒だし・・・コードィネーターだとウザイ視線が有りそuddからな・・・うーん・・・・みしー。

「機体はOGのアルト・アイゼンで全長は18メートルに下げて、  
能力はニュー・タイプとオリジナルでヨロシク！」

どうしてスパロボの機体を選んだかつて・・・だつてロボット好き  
の俺が一番のお気に入りがアルトだから、それに加えニュー・タイプ  
能力もあれば、SEEDの世界じゃ無敵になれるから！・・・だつ  
て一応別世界にいくなら最強になりたいじゃん

「わかった、アルト・アイゼンを選んだなら、ヴァイス・リッター  
とエクセレン・ブルウニングを着けないとね」  
なぜ？

「実戦での運用には基本として、ヴァイスリッターとの連携が不可欠  
となつてくるでしょ」

「そうでした・・・」

すっかり忘れてたな・・・

「よろしくね キョウスケ。そーいえばあいつと同じ名前だね」

・・・やつ言ええば俺・・名前いつたけ？

「面倒だから君の名前は教えたの」

神様が言つてくれました・・成る程・・・面倒だからか、ちょっと  
悲しい・・・・あ、自己紹介が遅れたけど・・俺は南武 恭介と言  
います・・OGのキヨウスケと同じ名前です、読みが・・・遅い自  
己紹介で下さいません！！

「誰に言つてるのよ？」

誰だつていいいじゃん・・・細かい事は気にしない。

・・と、それよりも。

「それより早く連れてつてくれ」

「はいはいわかりました」

神様はそう言つた、すると突然俺の周りの光出した。

「じゃあね、頑張つてね」

こうして、俺はエクセレンと一緒に・・能力と機体をもらい、旅立  
つた。

## S - 1 行動開始？（前書き）

遅くなつたあ〜〜  
遅れてしません。

## S - 1 行動開始？

「ジャンクばかりだな・・・」

本日、何度めかのグチをこぼしながら、周囲のデブリからジャンク品で使えそうなパーツを探す。

こちらに着てから、数年たつた。

たまに、アルトで戦争に介入しているが・・・。

「これでもなきゃ・・・あれでもないな・・・ん?あ、あつたあつた」

戦艦のパーツを探して見つけては拾っている。

そんなあれこれ、1時間。

「さすがに、アルトだけではこれ以上、もてないな」

そう呟き、輸送艦に戻り始める。

そして・・・時々思う。

今していることが

ただ真実から

・・・・・逃げているだけかもしれないといふことを

俺の輸送機は十分な量のパーティが集まつた。

「しつかし、なぐんかここだと墓荒らしをしてるみてーだな。 . . .  
・まつ俺には関係の無い話だがな。」

そつ、こゝはコニウスセブンの残骸空域多くの人たちが死んだ場所  
でもある。

「なんまんだ〜、なんまんだ〜」

とりあえず供養と謝罪のつもりで経を唱えていた、その時一筋のビ  
ームがこちらに向かつて飛んできた。

「うおわ〜！な！なんだー！いまのはー！」

俺はぎりのちよんのところでビームをかわした。センサーにモビル

スーツの反応ともう一つ作業艇があつた。

「なんなんだよー・・・よ〜し」

俺はモビルスーツの反応のほうに向かつていった。

「みつけ！」

さつきビームぶつ放しなしたかもしれないモビルスーツの姿を捉え  
た。

「・・・あれは一体。新型か？外見はザフト製ではなさそうだな。  
それに撃ってきたのはビーム兵器・・・ザフトはビーム兵器なんて  
もってねえし・・・まさか連合製か？」

頭部にアンテナが4本ついてて目が2つあって白いカラーのモビルスーシだつた。まあ、正体は知つてんだけ俺は通信を送つてみた。

「待てー！こちらに戦闘の意志は無い！」

しかし、相手はこちらの通信を聞いたやいねーのか攻撃続けてきた。

「問答無用つてことかい。」

俺は、はたから見たら不恰好すぎる体勢で避け続けたが、ショルダービームが掠つた。その時俺の中の何かが切れた。

「てめえ、戦闘の意志はねえって言つてんだろうおおおおおおーー！」

俺は相手に急接近した。しかし、相手はビームで乱射してくるが俺は自慢の動体視力で避けつつ相手の懷にしがみ付いた。この距離ならライフルのような武器は使えない。俺は直接回線で通信入れることにした。切れていても無用な戦いは避けたいからだ。

「おい！パイロット！戦闘の意思はないって言つてる！ー！」

相手のパイロットの声が入ってきた。

「あなたはさつきのジンの仲間だ。生かして帰せばまた狙われる。」

「俺は只のジャンク屋だ！それにこれがジンに見えるわけない！」

「信用できないー！さつきのジンはこちらにライフルを構えた！それにはつて内臓武器があるかもしれないー！」

確かにアルトにはあるなつて、そりゃない！

相手はビームサーベルに切り替え攻撃してきた。俺はまたもや紙一重で回避ながら再度説得しよう、と思ったが。もう我慢の限界だった。

「てめえいい加減にしろよ。そんなにやりたきや相手になつてやる！…」

俺は相手の懷に飛び込みヘッドにパンチを喰らわせた。しかし、ヘッドは無傷であつた。しかも頭部からバルカンを放つてきた。俺は咄嗟に頭部を持ち上げ発射角をずらした。

「危ねえなー！それに効かないのかよ。だつたらオリジナルの戦法みせてやろつじやねえの！」

俺は「ツクピット」にラッシュを始めた。装甲が傷つかないなら中のパイロットを衝撃でグロッキー状態にする作戦に切り替えた。

「喰らえ喰らえ喰らえ！」

ある程度パンチ（ステーク付き）を決めたらコツクピットを踏み付けて階段でも上がるよう駆け上がった。流石の敵さんも多少よれて大人しくなつた。そしてとどめにドロップキックをかまそうとした次の瞬間センサーが響いた。すると目の前に救命ポットを発見した。今の俺には面倒見切れないでの前のパイロットに交渉してみた。

「おーーーそこ」のパイロットの兄ちゃん！

「ぐつ、なつ何ですか！あなたはーーー何てめちゃくちゃな戦い方を。

「

「んなこと今はどつでもいい！近くに救命ポットがある。俺は面倒見れねーからお前捨てけ！大方近くに母艦があるだろ！」

「何なんですかあなたはー信じられないー！」

「だったら俺は投降する！人命が優先だ！そのライフル構えてろー！信じられなくなつたら何時でもぶつ放せ！その代わり救命ポットの奴は必ず助けるー！」

「わかりました。救命ポットは保護しました。あなたはこちひの誘導に従つてください。妙な行動に出たら容赦なく打ちます。」

「・・・わかった。そりゃピリピリするな。」

とりあえず俺は相手の誘導に従つた。そして白く大きな軍艦を目の当たりにした。

「でつっけえええー————！」

俺は思わず感激してしまつた。さつきのパイロットは、はあ、とため息を漏らしていた。中の格納庫でとりあえずいやあな歓迎を受けた。

「ちよっと、そんな物騒なもの下げてよ。」

「ふざけるな！モビルスーツに乗つてたんだぞー！ザフトの『コードイネイター』だろ貴様！」

目の前の軍服着たお兄さん方そう言いながら銃を構えていた。

「人を見かけで判断するなつて。第一俺はジャンク屋だし」「ディネイターじゃあねつて。信用できねえなら俺の輸送機この辺に放置しつばなしだから調べてくれよ。ジャンクパーツばっかり入ってるから。」

「とりあえず、あなたの名前を教えてくれないかしら」  
數から棒に目の前の軍服着た姉ちゃんがそう言つてきた。

「俺はキヨウスケ・ナンブだ。」

「ナンブ・・・?ビ」かで聞いたことがあるような。」

「アリス、あなた、一体どうしたの？」

「私はマリュー・ラミアス、この艦の艦長よ。」

「ほお」

「おどろかないの？」

「別にいいじゃんこよ。じゃあでかい私のポットは? それにして  
私のパイロットの呪わせんば?」

「ああ、それなら『艦長』————」

艦長さんの言葉を遮って男が報告にやってきたもよいだ。

「どうしたの？」

「確かに輸送機を発見しました。」この男の言ったとおりジャンクパーツと整備テックがあるだけでした。」

「ほり言つたとおりだろ。わざと解放してくれ。」

「それがさつきの戦闘で輸送機は被弾して使えなくなつてました。」

「ザツ……。」

俺は物凄くショックだった。

「ああへへ・だつたら途中までこの艦に乗つていけばいいわ。ねつ。」

「

「まませ・・・わうわうひいたときや。」

「」この時半分投げやつだつた俺は突如思いついたことが会つた。

「アハいやあのパイロットの兄ちゃんに会つてみたい」

「えつ」

「まあ、これから暫く旅を共にするんだからな。どんな奴か拝見してみたい。」

「えつええ、多分まだ格納庫に居ると想つからあつてくれるといいわ。」

「

「つこへつす、んじやちよつへり行つてしまつります。」

俺はやつらの機体の方向へ進んでいった。

「バジルール少尉、彼のことちょっと調べてみてくれない?」

「はい!」了解しました。」

「ええっと、ねえねえねえ、あのモビルスーツに乗ってた奴って誰だか分かる?」

俺は近くを通りかかった茶髪の少年に聞いた。少年は驚いたように俺に言った。

「えっ、僕ですか?」

「ほんとかよ~!お前すっげなあ~!!」

純粹に感心した。俺とそんなに歳も変わらない奴がこんなもの操縦していたことに驚いていた。そして少年はバツの悪そうな顔をしながら俺に言った。

「つだつて、僕はコードィネイターですから。」

「コードィネイターでもすげーもんはすげーよ。」

少年はキヨトンとしていた。おやじくコードィネイターであることを良く言われなかつたのであるつ。

「といふあなたは？」

「俺か？俺はわざきの赤いのに乗つてた男や」

「えつーじゃああなたもコードィネイター？」

「いいや、俺はナチュラルだけど。あつ俺暫くこの艦に乗つけてもひつこになつたから」

「ええつー。」

「とつあえず自己紹介だ。俺はキヨウスケ・ナンブよ。」

「キラ・ヤマトです。」

「わつか。じゅとつあえず歳も近いみたいだし敬語はやめこしきつ  
せ。」

「えつ、うん。」

・・・・・これが俺と彼とそしてこの白い戦艦との出会いだった。

・・・そして俺は今まで田を背けてきた戦争という真実に、・・・・・深く関わっていくのだった。

・・・あ、エクセルンのこと忘れてた・・・が、いつか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9108n/>

---

機動戦士ガンダム S E E D 介入された物語

2010年11月29日20時02分発行